



Title	ニューヨーク移民街における中国人移民女性の社会改革運動にみる20世紀初頭の「ネーション」と「ナショナルリティ」の諸相
Author(s)	佐々木, 一恵
Citation	年報人間科学. 2000, 21, p. 265-286
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10101
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ニューヨーク移民街における中国人移民女性の社会改革運動にみる 20世紀初頭の「ネーション」と「ナショナルリテイ」の諸相

佐々木 一恵

〈要旨〉

本稿は、20世紀初頭のニューヨーク移民街における中国人移民女性による社会改革運動を取り上げ、彼女たちの運動にみられた「ネーション」と「ナショナルリテイ」の関係を、当時のアメリカの社会再編の文脈から考察するものである。中国人移民は1882年の排華移民法によって、アメリカではじめて国籍による移民制限と、「帰化不能外国人」の指定を受けた移民であった。また、19世紀末の都市モラル改革以降、20世紀初頭の「アメリカ化運動」においても、中国人移民は「一移民」と「異人種」との間を行き来する不安定な存在であった。改革指向の中国人移民は、彼らを取り巻く問題の原因を、中国人移民の「市民的性質」の程度と出身国の「近代化」の程度にあると捉え、祖国救済運動及び地位改善運動を展開していく。なかでも改革指向の女性たちは、文化多元主義の方針を掲げていたYWCAのインターナショナル・インスティテュートの支部をチャイナタウンに設立し、中国人移民女性に対する社会・教育活動を行っていった。そこで彼女たちが試みたことは、中国人女性の「市民としての資質」の向上と、エ

キゾチズムに陥らない形の新たな「民族性」の構築であった。それは欧州からの移民にみられた原初的・伝統的な「ナショナルリテイ」とは異なる、構築的かつ近代的な中国人「ナショナルリテイ」を通じて、多元主義的なアメリカの社会再編運動に参加することでもあった。

キーワード

中国人移民、ナショナルリテイ、アメリカ化運動、女性改革者、文化多元主義

20世紀初頭のアメリカは、19世紀末以来の移民の大量流入や急激な産業化・都市化などによって生じた社会不安を、多種多様な「改革」によって收拾しようとした時期であった。それは同時に、「ネーション(Nation)」すなわち「アメリカ(的)国民」の構築あるいは再構築による社会秩序の再編が試みられた時期でもあった。この「アメリカ(的)国民」の指示内容をめぐって、愛国主義的なものから文化多元主義的なもので、様々な立場の運動が繰り広げられていった。これら一連のアメリカ社会再編の動きの中で、黒人及びネイティブ・アメリカンと並び改革の「対象」となっていたのが、19世紀後半以降アメリカにやってきた「移民」であった。同化、隔離、制限、様々な対策が移民に対して講じられていくとともに、彼らの側からも様々な運動が展開されていくようになる。

この移民に対する／による運動において、重要なファクターとなつたのが、「ナショナルリテイ(nationality)」すなわち「出身国(民性)、あるいは出身民族(性)」であった。移民を法的に制限する場においても、1921年及び1924年にはそれ以前の読み書きテストなどによる間接的な方法にかわって、出身国(ナショナルリテイ)別割当てによる制限策が採られるようになっていった¹⁾。もう一つ、この時期の移民の改革運動において特徴的であったのは、運動の対象者および推進者の大半が、ともに女性で占められていたということである。「女性クラブ」、「アメリカ革命の娘達(DAR)」、セツルメントハウス、プロテスタント都市宣教、「YWCA」などの組織が、この時期積極的に移民女性を対象とした活動を展開していった²⁾。

これらの組織による移民女性のための社会活動はまた、いわゆる革新期アメリカにおける市民理念、すなわち国のために活動することは市民としての義務でありかつ特権である、という参加型市民の理念を色濃く映し出すものであった。しかし、こうした市民理念もしくはある種の報国意識にもとづく女性による女性のための改革運動は、必ずしもアメリカあるいは西欧に限られた動きではなかった。20世紀初頭は、いわゆる「残り」の地域においても様々な女性改革運動の展開がみられた時期であった³⁾。ただしこの残りの地域、あるいは一部の移民女性にとってはその出身地、における運動は、いずれも諸外国による圧力からの民族解放・祖国救済運動と深くつながりをもつものであった⁴⁾。よって移民女性、なかでも改革指向の移民女性にとつては、故国における女性改革運動は、アメリカにおける一連の社会再編の動きに対する対応の糸口を示すものでもあった。アメリカにおける女性改革運動と故国における女性改革運動をともに視野に収めながら彼女たちは、両者の間を行き来するような運動を模索し展開していくのである。

本稿では、中国人移民女性による改革運動、とりわけ1882年の「排華移民法」制定以降急速に発展したニューヨークの中国人コミュニティにおける運動を取り上げ、そこに現れた「ネーション」と「ナショナルリテイ」の関係を20世紀初頭アメリカの社会再編の文脈から考察する⁵⁾。とくに、改革指向の中国人女性たちがどのように、またいかなる目的でもって中国人移民女性を対象とする活動を展開していったかに焦点を当て、そこから「ニュー・ニグロ」⁶⁾の

ような創発的なものとも、また欧州からの移民にみられた「民族文化」を保持をつうじた「ナショナリティ」とも異なる、「近代市民的」性質を具え、かつ近代的国民国家としての中国の存在を後ろ支えとする、中国人「ナショナリティ」を立ち上げていった過程を追っていく。また、この中国人「ナショナリティ」とアメリカ「ネーション」との間の関係についても、20世紀初頭のアメリカ化運動と文化多元主義及び、同時期の中国における一連の改革・革命運動、とりわけ1911年の辛亥革命と1910年代後半の中国新文化運動を議論に含めながら考察していく。

本稿の進め方としては、まずはじめに(1)19世紀末の男性労働者中心の初期中国人コミュニティと彼らを対象とした都市モラル改革運動について取り上げ、そこでで浮かびあがってきた中国人移民の「一移民」と「異人種」の間の揺らぎとそれが内包する問題について論じる。次に、(2)中国人コミュニティにおける中国人移民女性に対する初期改革運動と、中国における変法改革に始まり中華民国の成立へと到る動きとの関係について述べ、それがその後の中国人移民女性による／ための改革にどのような輪郭を施していったかについてみていく。そして、(3)20世紀初頭における「アメリカ的国民」再編の動きの中で、実際に先の中国人移民の「揺らぎ」がどのような形で中国人コミュニティの中に現れることになったのか、またそれに対してどのような目的、内容及び方向性をもつ活動が具体的に中国人女性改革者たちによって展開されていったのかについて、それぞれアメリカ化運動及び文化多元主義、中国新文化

運動などとの関連から検証していく。

1. 初期中国人コミュニティと都市モラル改革

1880年代後半から90年代前半にかけて、多くの中国人労働者が風当たりの強いカリフォルニアを後に、新たな機会を求め東漸した。そのうちかなり人数が最終目的地としてめざしたのが、ニューヨークであった⁷⁾。当時のニューヨーク、とりわけロウワー・イースト・サイド地区は、4キロ平方キロ四方にも満たない土地に、東欧、南欧、中央ヨーロッパからの移民が、文字通りひしめき合っ

て暮らす「移民過密地区」であった。チャイナタウンは、このロウワー・イースト・サイドの移民街の最南端に位置していた。19世紀末には既に1万を越える中国人がニューヨークに存在し、そのうちの約4千人がチャイナタウンで暮らしていたという⁸⁾。彼らの多くは手洗い洗濯屋を開き、自らも洗い係やアイロン係として働きながら、新たな生活をスタートさせていった。当時、彼らが経済的にまた精神的に頼みとしたが中国人コミュニティ内の組織であった。チャイナタウンには、會館と呼ばれる同郷会、またそれぞれの會館が結集して1883年に設立されたニューヨーク中華總會館(CCBP)、宗族組織、また公司房と呼ばれる互助組織が存在し、彼らのほとんどがこうした組織に所属し暮らしていた⁹⁾。チャイナタウンは、こうした西部からの移住者を含めた新参者が寄り集まる場として発展していく一方で、賭場・売春宿・阿片屈が数多く軒を並

べる歓楽街でもあった。しかし、当時のチャイナタウンの歓楽街は、「中国人の歓楽街」というよりはむしろ、多くの白人や黒人が客、経営者あるいは従業員としてふらつく場所であり、「都市モラル改革者」の「重点対象地区」となっていく¹⁰。

19世紀末の改革指向の人々にとつてアメリカの都市とは、非プロテスタントの新移民であふれかえり、賭場、酒場、売春宿などの「不純な娯楽施設」の誘惑に満ちた場所であった。彼らはこうした都市の状況を危機的と捉え、その問題の根源を、貧困などの社会・経済的状况ではなく、貧困者自身の「個人的」道徳の退廃に求めている¹¹。様々な社会浄化組織が設立され、都市貧困層のモラル改善を目的とした活動を次々と展開していく¹²。こうした都市モラル改革運動を推進した組織の一つで、チャイナタウンの一角を陣取っていたのが、「チャイナタウン・ミッドナイト・ミッション」の別名で知られる、レスキュー・ソサエティー(The Rescue Society)であった。1892年にトーマス・ヌーナン(Thomas Noonan)によつて設立され、チャイナタウンにおける「救済活動」にすぐさま乗り出していった。しかし、この組織が活動の対象としたのは、「白人」のアルコール・麻薬中毒者、売春婦、ホームレスなどであり、とりわけ「モラル的に墮落した白人女性」の救済及び更正をその活動の主たる目的としていた¹³。実際、当時チャイナタウンの売春婦の大半は白人女性であり、中国人の売春婦は少数派であった¹⁴。また、中国人男性は近隣の移民コミュニティとの比較においても、問題が少なくとされていた¹⁵。モラル改革派の人々が中国人男性を問題

としたのは、白人女性が中国人男性と交際、あるいは結婚している場合であった。ローワー・イースト・サイドの移民地区の「「移民」としてそこそこの評判を得ていた中国人も、この白人女性との交際、結婚という「モラル的退廃行為」において、すぐさま「邪悪な異人種」へと転落することになる。都市モラル改革者にとつて中国人は、「優良な移民」と「邪悪な異人種」という両極端のカテゴリーを行き交う存在であったのである。

19世紀末の都市モラル改革を、社会浄化組織とともに進めていたのが、プロテスタントの都市宣教運動であった。宣教運動は、都市におけるプロテスタンティズムの衰退がアメリカの都市に「悪」の蔓延を招いた原因であるとし、都市移民層を対象とする宣教活動を展開していった。都市宣教運動の主たる使命は、都市におけるプロテスタンティズムの回復にあった。しかし同時にそれは、動揺するアメリカ社会秩序をプロテスタンティズムによつて建て直し、安定化させていこうとする試みでもあった¹⁶。中国人に対する宣教も、彼らの数が増えるに従つて積極的に行われるようになった。1885年には既にニューヨークとブルックリン併せて、28校の中国人日曜学校が存在していた¹⁷。

こうしたプロテスタントの中国人ミッションに足繁く通ってきたのが、大都市の街角の手洗い洗濯屋などで働くその大半が独身の中国人男性であった。彼らのほとんどはチャイナタウンの中国人社会の組織に属しながら、それとは関係のないプロテスタントミッションにも頻繁に顔を出していた¹⁸。中国人はこのプロテスタントのミ

ッションでも、「まじめなよい移民」で通っていた。しかし、中国人男性が教会の日曜学校の白人女性教師と交際していることが発覚すると、すぐに中国人移民は問題視されることになった¹⁹。プロテスタントの教会側は、「異人種」である中国人男性と白人女性の結婚を、たとえ中国人男性が改宗していても認めない方針を打ち出し、また日曜学校の教師についても既婚の女性に置き換えるなどの「対策」をとった。一方、地元新聞がこうした事件をスキャンダルとして書き立て、反中国人移民感情を煽ったことから、教会に通う中国人を狙った白人男性によるいやからせや暴力事件などが度々生じるようになっていた²⁰。中華總會館などのチャイナタウンの組織は、事件がキリスト教絡みのものであったことから、問題の対応には概して冷淡であった。そのため、中国人キリスト教関係者が中国人ギルド (The Chinese Guild) を1889年に結成し、暴行事件などの対応に当たっていった。また中国人ギルドは、教会に通う人たちのために、役所への届け出から、賃貸契約、係争処理、翻訳に到る、ありとあらゆる手助けも行っていた²¹。

またこの時期、都市宣教全般における運動方針が、改宗した移民宣教師を中心とする宣教活動へと変更され、チャイナタウンの中に中国人を牧師とするミッションが次々と設立されていった²²。牧師をはじめとする中国人キリスト教リーダー達は、宣教活動ばかりではなく、福祉活動などを通じてチャイナタウン内部に徐々に足場を築いていった。さらに彼らは中国人コミュニティの信頼をとりつげながら、チャイナタウンの「浄化」運動にも次第に着手していく

のである²³。この「浄化運動」に関しては、中国人権利平等リーグ (Chinese Equal Rights League) を創設し、アメリカにおける中国人の地位向上のための政治活動を行っていたワン・チン・フー (Wong Chin Foo) も、チャイナタウンにおける賭場、売春宿、阿片窟の一掃を熱心に唱えていた。彼ら「改革派」の目には、チャイナタウンの「古い」社会こそが彼らの運動の前に立ちはだかる問題の根であり、また中国人を「一移民」から「異人種」へと追いやる元凶として映っていたのである²⁴。この「一移民」と「異人種」との間の「揺らぎ」は、彼ら中国人改革者によって中国人移民全体を悩ます「問題」として捉えられていくのである。

20世紀に入り、一般の改革の重点が「個人のモラル」から「環境」へと移り、改革のレトリックも「生物・人種」的なものから「文化的なものへと移っていても、この「揺らぎ」自体は19世紀末のモラル改革からそのまま持ち越されていく²⁵。よって「一移民」と「異人種」との問題は、20世紀初頭にチャイナタウンで展開される一連の中国人女性による改革活動の中においても、つねに耳障りな通奏低音として流れていくことになるのである。そしてこの低音を取り除くべく彼女たちがその活動を通じて示そうとしたのが、ローワー・イースト・サイドの移民地区における「一移民」としての中国人、すなわち「異人種」としての中国人ではなく、アメリカを構成する「ナシヨナリティ」としての中国人、というものであった。

2. 中国における改革・革命運動とニューヨーク中国

人コミュニティにおける女性改革運動

チャイナタウンにおいて改革を唱える声は、20世紀に入るまではほんの小さな囁きにすぎず、その大方が当時のチャイナタウンの雑踏のざわめきの中に消えていった。しかし、この流れに変化を与えるきっかけとなったのが、中国における1898年の康有爲をはじめとする変法派による改革・近代化運動の開始であった²⁶。1902年には、保國會 (Chinese Empire Reform Association) の支部がニューヨークに設立され、ニューヨークの中国人コミュニティの改革・近代化に乗り出していく²⁷。変法派自体は、儒教を中国の精神的中核として重要視していたが、ニューヨーク支部を立ち上げたのは、ジョセフ・シングルトン (Joseph Singleton、中国名チュウ・モンシン) をはじめとする中国人プロテスタントの改革派であった。さらに、1905年には清王朝体制内の改革を批判し、革命の必要性を説く孫中山 (孫文) が中國同盟會を旗揚げすると、中国人コミュニティにも同盟會が組織されていった。ニューヨークのチャイナタウンからは、次第に弁髪が姿を消し、街の様相も少しずつ変化していくことになる。

ニューヨークの中国人コミュニティにも影響を及ぼすことになった中国における改革・近代化運動において、重要な課題の一つとされたのが、「女性の改革」であった。康有爲は改革に先立つ15年前

の1883年に反纏足協會を設立し、反纏足運動を展開していった。また変法派のリーダーの一人、梁啓超は人口の半分を占める女性が男性の隷属状態に置かれ、何ら社会的に有意な活動についていないことは、国の損失であるとし、女性の解放と女性の教育の必要性を熱心に説いた。当時の康や梁をはじめとする改革派の議論の核心は、「賢い女性はいずれ賢い母となり、賢い子どもを育て、中国を強い国に導く」、というものであり、女性の教育と国の将来とが互いに結びつけられたものであった。この変法派による女性の改革の波は、ニューヨークの中国人コミュニティにも届くことになる。

20世紀に入り、ニューヨークのチャイナタウンにも少しずつではあるが、中国人女性の姿が見られるようになっていた。しかし、女性大方は一日の大半を家の中で過ごし、改革派による女性教育の必要性が伝わってきても、それが突然女性たちの生活に大きな変化をもたらすことはなかった。当時、チャイナタウンの中国人女性に対して、働きかけを行っていたのは、プロテスタント各派のアメリカ人女性宣教師たちであった。チャイナタウンに1892年に作られたバプティストのモーニング・スター・ミッションでは、設立当初から女性宣教師が中国人女性の家庭を訪れ、布教活動及びクリスチヤンの生活を中国人女性に紹介する活動を行っていた。ただ、こうした女性宣教師による活動も、チャイナタウンに変革の気運が見え始めるまでは、ほとんど失敗に終わっていた²⁸。しかし、20世紀に入り、次第に状況は変化していく。1902年に中国宣教から帰国し、チャイナタウンのメソジスト中国人ミッションに加わったカー

クパトリック女史は、家庭訪問活動において次第に成果を上げていくことになる²⁹。また1903年にプレスビテリアン教会のヒューイ・キン婦人(旧姓ルイス・バン・アーナム Louise Van Arnam)がチャイナタウンに初めて幼稚園を立てると、母親たちはそこへ子どもたちを通わせるようになり、また女性宣教師らが企画したピクニックなどにも参加するようになった。チャイナタウンの中国人女性には、頻繁ではないにしろ家から外に出るようになっていった³⁰。

この時期中国においては、改革の動きが革命の気運へと次第に変化していき、女性解放のスローガンもこれまでの「賢い女性、賢い母」から「活動する」賢い女性、賢い母へと変化していった³¹。この新たな流れは、1911年の辛亥革命でさらに確固なものとなり、ニューヨークの中国人コミュニティにも変化をもたらしていく。中国における清朝の終焉と中華民国の誕生を受けて、ニューヨークの中国人コミュニティの男性改革派の多くは、中国人移民の法的社会的地位改善、中国と諸外国との不平等条約撤廃、を求める政治活動へと向かっていった³²。一方、中国人コミュニティ内の活動や中国人女性のための活動は、中国人女性自身の手で委ねられることになる。ニューヨークの中国人プレスビテリアン教会では、中国人女性を対象とした聖書クラスが1911年に開始され、中国人女性を教師とした聖書講義が行われていった³³。なかでも、こうした流れの変化にとりわけ敏感に反応したのが、学生たちであった。

1910年にはフ・ピンサ(Hu Ping)を中心とする女子学生が、アメリカ中国学生東部地区連盟内に、中国の支援及びニューヨーク

の中国人コミュニティの社会的・教育的状況の向上を目的とする社会福祉委員会を設置している。この委員会を足場に、中国生まれ・アメリカ生まれの学生たちが熱心に活動を展開していった³⁴。彼女たちの多くは1911年に中華總會館(CCHA)が設立した中国人学校で、教師として中国公用語、英語、数学などを教えたり、女性の改革・近代化をテーマとする演劇を上演するなど、中国人コミュニティの改革活動に取り組んでいた。さらに、このコミュニティ活動の傍らで、彼女たちはバザーや様々な催しを通じた募金活動を行い、中国の改革・近代化を支援する活動を積極的に展開していった³⁵。この新たな「活動する」賢い女性たちにとって、ニューヨークの中国人コミュニティでの社会・教育活動と中国で初めて近代国民国家の体裁をもつ中華民国の支援は、それぞれ個々バラバラなものではなく、むしろ有機的意味合いをもつ一体的なものであったのである。それは、次にみる1910年代のアメリカの社会状況とそれに対応した様々な改革運動、新生中国における新たな状況の展開の中で、よりはっきりとした形で浮かび上がってくる。

3. アメリカ化運動、文化多元主義、中国新文化運動と ニューヨーク中国人女性に対する／による改革運動

1910年代後半、アメリカの中国人コミュニティは、二つのナショナリズムの間を生きることになる。第一次世界大戦のどさくさに乗じて1915年に日本政府が中国に突きつけた「対華21ヶ条

の要求」は、中国人ナショナリズムを一層高揚させていった。また第一次世界大戦は、アメリカにおいても「アメリカ化運動」という形でナショナリズムの高揚をもたらすことになる。本節では、まず(1) 19世紀末以降中国人コミュニティにつきまとう「移民」と「異人種」の間の「揺らぎ」が、「アメリカ化運動」の中でどのように現れていたかについてみていく。また、(2) この「揺らぎ」の問題を、改革指向の中国人女性たちがどのように捉え、それに対してどう対応していったかについて、当時の文化多元主義及び中国新文化運動との関係からみていくことにする。

(1) アメリカ化運動とニューヨーク中国人コミュニティ

アメリカ化運動は、19世紀末から20世紀初めにかけての大量移民の流入や急激な都市化・工業化などによって多様化あるいは混乱の相を呈するアメリカを、「アメリカ的国民」のもとに再編・統合していく一つの試みであった。アメリカ化運動は、「アメリカ革命の娘たち(DAR)」などの組織的な愛国運動や、セツルメント・ハウスなどの慈善団体による社会改革運動、またプロテスタントの都市宣教運動、などの中で次第に象られていき、第一次世界大戦期にそのピークを迎えることになる。しかし、このアメリカ化運動は、ある定まった「アメリカ」をその対象者に擦り込む単一ベクトルの運動というよりはむしろ、複数のベクトルが錯綜しあう運動であった。アメリカ化運動と一口にいても、その内容は「100パーセント・アメリカニズム」といったものから、「文化多元主義」的なもの

まで、決して足並みの取れたものではなかった。確かに、いずれの組織も「アメリカ的国民」化を試みてはいたものの、それぞれが思い描く「アメリカ的国民」の間には隔たりがあった。また、何をもって「アメリカ的国民」とするかに違いがみられたように、誰をもつて「アメリカ的国民」にしていくかについても相違があった。さらに、アメリカナイザー側にも様々な立場があったように、対象となった移民の側も単なる一方的な受け手ではなかった。この一様ではないアメリカ化運動は、「帰化不能外国人」である中国人とそのコミュニティにおいてさらに、複雑な動きをみせることになる。

しかし、足並みの揃わないアメリカ化運動にも共通点があった。それは、多くの組織において活動の重点が女性に置かれたことであった。プロテスタントの都市宣教では、その「最も効果的な方法」³⁶⁾として20世紀初めから、移民の女性と子どもを対象とする活動に重点を置く方針が取られていった。また、移民局の特別担当官であったケイト・ウェイラー・バレットも、「我々が移民をアメリカ化するには、その女性を対象とするのが最も有効である」とし、その理由に、「日常生活の問題に対する女性の態度が、自然と家族の他のメンバーの中にも浸透していく」ことを上げている³⁷⁾。女性の移民を主な対象とした活動は、改革指向のアメリカ人女性たちによって進められていくことになる。ソーシャル・ワーカー、宣教師をはじめ、「アメリカ革命の娘たち(DAR)」、婦人クラブなどのメンバーたちが、それぞれの方針のもと移民女性に対して様々な働きかけを行っていた。

ニューヨークのローワー・イースト・サイドのあらゆる地区において、彼女たちの姿をみる事ができた。ただ、その最南端のチャイナタウンでは、プロテスタントの女性宣教師と、時折家庭訪問にやってくる公立学校の女性教師以外は、ほとんど彼女たちの姿はみることができなかった。プロテスタントや公立学校以外の組織においては、中国人女性性は「アメリカ化」の対象として捉えられていなかったのである。それは、「オリエンタルを除く、すべての外国人をアメリカ化、教育、市民権の対象とみてきた」、というフランシス・ケラー (Francis Keller, 「北アメリカ市民リーグ」ニューヨーク支部の設立者で、アメリカ化運動の中心的推進者) の言葉にも表れている³⁸。チャイナタウンという「異界」の地で暮らし、「帰化不能外国人」でもある中国人女性性は、「アメリカ化」の対象としては意識されなかったわけである。

一方、プロテスタントの都市宣教においては、すべての移民女性性をプロテスタントへ導くことは、「アメリカ・キリスト教民主主義に(彼女たちを) 同化していく仕事」と捉えられていた³⁹。よって、中国人女性が住む場所も「帰化不能外国人」という位置づけも、女性宣教師たちにとっては布教活動を差し控える障害とは映らなかった。しかし、彼女たちの中国人移民への宣教は、他の移民への宣教と比べるとはるかに海外宣教の延長線の性格が強かったことは否めない。アメリカ国内で中国人移民布教に携わった後、海外宣教師として中国布教へ赴いたり、また中国布教に携わった後、国内の中国人宣教にあたるなど、海外宣教と国内宣教との間に大きな区分は設

けられていなかった。20世紀初頭、移民のアメリカ化を唱える一般の声が次第に大きくなると、プロテスタント各会派は内国伝道局と海外伝道局とを正式に分離した。移民宣教は国内伝道局のもとに置かれ、「アメリカ化」運動の一環として展開されていた。しかし、中国人移民宣教においては他の移民宣教と比べて、内国伝道局と海外伝道局の分離後も、海外宣教との区分ははっきりと設けられなかった。とりわけプレスビテリアン派においては、「オリエンタルのコロニーはとりわけ外国的であり、また彼らの多くには市民権が認められておらず、彼らに対する偏見も著しい」との理由から、中国人移民宣教の内国伝道局への編入は見送られ、そのまま海外伝道局の下に置かれる方針が取られた⁴⁰。一方メソジスト派では、1907年の内外の伝道局の分離にともない、すべての移民宣教は内国伝道局の下におかれることになった。「キリストのためのアメリカ」をモットーに移民宣教活動を進めていたが、中国人移民宣教においては海外宣教の延長線の性格がみられた。1907年からメソジスト派のニューヨークの中国人移民宣教をに携わり、後に「チャイナタウンの母」と呼ばれたメアリー・バンタ (Mary Banta) に対して、「必要以上に保護的かつ隔離的であり、チャイナタウンをローワー・イースト・サイドの一角ではなく、あたかも異教の地であるかのよう」に扱っていた」と不満を漏らす中国人女性もいた⁴¹。

当時、バンタをはじめとするプロテスタントの女性宣教師が中国人女性を対象に行っていた活動とは、他の移民宣教と同様、家庭訪問や、チャイナタウン内の教会での聖書教室、英会話教室、裁縫教

室などであった。とりわけ、男性中心の組織ばかりであったチャイナタウンにおいて、こうした女性宣教師が主催する各種教室は、中国人女性にとって重要な社交場ともなっていた。しかし、すでに自ら率先してコミュニティー活動を開始していた、学生を中心とする中国人女性の目には、これら女性宣教師たちの活動は、時代遅れなものとして映った。また中国人女性に対する女性宣教師側の視線についても、前世紀の異教宣教師の影をひきづる部分を感じていた。すなわち、女性宣教師たちによる活動は、彼女たち中国人女性を「異人種」として近隣の他の移民女性から隔離するものに感じられたのである。⁴²

しかし、この「異人種」としての中国人への視線は、「チャイナタウン・セツルメント・フォー・ガールズ」(Chinatown Settlement for Girls)という組織の活動において、よりあからさまに示されることになる。このセツルメントは、改革指向の中国人女性が「今世紀的」かつ「科学的」と考えた一般のセツルメント・ハウスとは大きく異なり、ネイティブ(白人)主義改革者による組織であった。この組織の目標は、「あらゆる年齢とナショナルリティーの女性達の姿を日々発見するこの悪と犯罪の中心」において、そこに「住み着き、中国人と暮らす我々アメリカ人の若い女性達を対象として」活動することにおかれていた。⁴³ すなわち、よきアメリカ市民になるべき白人移民の若い女性を、チャイナタウンという異界における「罪深い生活」から更正させることを主な目的とするものであった。こうした組織の存在は、移民地区を一步外にできると中国人移民が遭遇す

ることになる視線をチャイナタウンに居ながらにして経験させるものであった。

確かに、ローワー・イースト・サイドの移民地区の中では中国人は問題の少ない「優良な移民」であった。⁴⁴ しかし、この移民地区の優等生も一端そこを離れると、他の近隣の移民たちよりはるかに厳しい環境に置かれることになる。中国人男性よりはるかに風当たりは弱かったとはいえ、それでも中国人女性がチャイナタウンの外で職を得ることはかなり難しいことであった。彼女たちがローワー・イースト・サイド以外の地域で、当時手に入れることができた仕事とは、チャイナドレスを着て、「新着の阿片窟スリラーものを上映する映画館でチケットやたばこを売る」売り子の類いであった。⁴⁵ こうした中国人女性を取り巻く状況は、学生や改革指向の女性たちを、中国人コミュニティーにおける、さらなる女性の社会・教育的状況の向上へと向かわせていく。

近隣の他の移民コミュニティーにはどこにでもいた、「今世紀的」かつ「科学的」なソーシヤル・ワーカーはチャイナタウンには入ってこなかった。⁴⁶ 結局改革指向の中国人女性たちは、その任を自分たち自身の手で担っていくようになる。彼女たちが試みたものは、中華總會館(CCHA)のような移民コミュニティー単独の慈善組織による活動とは異なるものであった。それは、「アメリカ社会」と何らかのつながりをもった、あるいは「アメリカの社会活動」の一環として中国人女性を対象とする活動であった。彼女たちが思い描く活動を行うために、組むべき相手として働きかけていったのが、1

910年にニューヨークに設立されたYWCAのインターナショナル・インスティテュートであった。

(2) 中国新文化運動、文化多元主義とニューヨークにおける

中国人女性の改革活動

アメリカ化運動が盛り上がりを見せていた頃、中国においても1915年に日本政府が突きつけた「対華21ヶ条の要求」によって、中国ナショナリズムが高まりをみせていた。中国ではこの頃から、陳獨秀らを中心とする「デモクラシーとサイエンス」をスローガンに掲げた新文化運動が動き始める。「自主的、進歩的、世界的、実利的、科学的」であることが唱道され、西欧近代思想が次々と紹介されていった。また儒教思想、より具体的には儒教にもとづく家族制度と専制主義が、中国の近代国家としての発展を阻むものとして批判されていく。この家族制度との関連から、女性の解放そして自立が熱心に唱えられていった。これらの活動からも窺えるように、この新文化運動とは、「近代化を通じて新中国の創造」によって、中国の近代的国民国家グループ入りを試みる一つの「祖国救済」活動であった。女性の改革・解放運動もこの祖国救済活動の一環として展開されていくのである⁴⁷⁾。

こうした中国での新たな動きは、ニューヨークのコミュニティーにも伝わり、辛亥革命以降進められていたチャイナタウンの改革にさらに拍車がかかっていく。中国の伝統的祝日が廃止され、廟の数も次第に減っていった。そして、この改革が進むにつれて、中国人移

民のキリスト教への改宗が一層進んでいく⁴⁸⁾。このチャイナタウンでの動きを象徴するかのようには、1919年にはバプティスト派の中国人司祭リー・トウ (Lee To) が「チャイナタウンの市長」と呼ばれる中華總會館 (CCBA) の会長に選任され、二期に亘り会長を務めることになる。これら一連の動きを受けて、改革指向の中国人女性たちも、新たな活動を展開していくことになる。当時チャイナタウンの多くの女性にとつて、プロテスタント教会の主催する裁縫教室が、ほとんど唯一といってよい社交場であった。改革指向の女性たちが試みたのは、こうした裁縫教室の他に、中国人女性が社会・教育的状況を向上していくための場をチャイナタウン内に組織していくことであった。そのため、彼女たちの側から働きかけていったのがYWCAのインターナショナル・インスティテュートであった。

インターナショナル・インスティテュートは、1910年に移民女性のための活動を組織的に展開していくことを目的に、ニューヨークのYWCAナショナル・ボード内に設立されたものである。設立されるやいなや、インスティテュートその活動の指針を立てるべく、ニューヨークのローワー・イースト・サイド地区の女性移民の調査に取りかかっていく⁴⁹⁾。このインターナショナル・インスティテュートを立ち上げるために、採用されたのがエディス・テリー・ブレマー (Edith Terry Bremer) であった。シカゴ大学を1907年に卒業したブレマーは、まずシカゴで女性労働組合の調査員となり、その後ニューヨークに移り、セツルメントハウスのソーシ

ヤル・ワーカーとして働いていた時に、YWCAから声をかけられ、インターナショナル・インスティテュートの組織化を任されることになる。このブレマー率いるインターナショナル・インスティテュートが、その活動の基本方針として掲げていったのが、「インターナショナル・イズム」であった。

ブレマーはシカゴ時代に、ジェーン・アダムス (Jane Addams) やウイリアム・トマス (William I. Thomas) をはじめとするいわゆるリベラル派と接触しており、移民の同化に関しても彼らの影響を強く受けていた。その後ブレマーは、ニューヨークにおいて、ホーラス・カレン (Horace M. Kallen) をはじめとする多元主義者の思想に直に触れながら、インターナショナル・インスティテュートのための基本理念を模索していく⁵⁰。ブレマーがインスティテュートの基本理念の参照枠としていったのは、カレンのものではなく、むしろカレンに批判的であったアイザック・B.・バークソン (Isaac B. Berkson) やジュリウス・ドラチエスラー (Julius Drachler) らの多元主義であった⁵¹。彼らの唱える多元主義においては、個々の将来は「生得的に」決定されているものではないとされ、また移民コミュニティについても、文化的伝統を継承また発展させて行く場として重要ではあるが、一方で国のより広範な活動にも参加していくことが重要であるとされていた⁵²。こうした形の文化多元主義をブレマーは新たなインスティテュートの指針として据えるところに、それを「インターナショナル・イズム」あるいは「真のアメリカ」と呼んでいく⁵³。

インターナショナル・インスティテュートは1911年より、「すべてのナショナル・女性の女性たち」⁵⁴、そして「ヨーロッパやオリエンタルの少女たち」を対象に、彼女たちのアメリカへの適応の手助けを目的とする活動を始動させていく。このインターナショナル・インスティテュートに対して、先の改革指向の中国人女性たちは、活動の支援と協力を求めていった。彼女たちは1918年9月に、「これまでチャイナタウンにはなかった、中国人女性のための社会的交流と教育的向上を目的とするセンターの設立」を求める嘆願書をYWCA側に、約75名の署名を添えて提出している⁵⁵。その後、ヘレン・モイ (Helen Moy) を中心とする中国人女性たちとインターナショナル・インスティテュートとの間で、チャイナタウンのセンター設立に向けた準備が進められていく。インスティテュート側がまず、新しいチャイナタウンのセンターのYWCAワーカーとして推薦したのは、メソジスト派の女性宣教師として10年以上中国人女性と関わり続けてきた、メアリー・バンタであった。インスティテュート側としては、中国人女性にとって馴染みやすいであろうとの判断からメアリー・バンタを薦めたようだが、モイら中国人女性側はこの申し出に対しては難色を示す⁵⁶。インスティテュート側が次に薦めたのは、中国からの留学生でコロンビア大学の大学院で学んでいたローダ・コン (Rhoda Kong) で、この新提案には中国人女性たちもすぐさま同意する。コンは半年近くボランティアとして、チャイナタウンの若い中国人女性を対象とする家庭科学の勉強会の講師を務めた人物で、チャイナタウンでの認知度はバンタと比べると数段

低かったが、モイたちにとってはコンはバンタよりはるかに望ましい人物であった。⁵⁶ 1919年10月には正式にコンがYWCAの中国人メトロポリタン・ボードのワーカーとして採用されることになる。コンを中心にYWCAのチャイナタウン支部がモット通り42番に設立され、「中国人女子委員会」(The Chinese Women's Association)の名称のもと、本格的に活動を展開していった。⁵⁷

中国人女子委員会が特に力を入れたのが母親クラブの活動であった。「中国人女性の市民的性格の育成と向上」を目的に、母親たちの識字率の向上、家庭科学や公衆衛生に関する知識向上のための活動の他、音楽、英語教育などの活動を展開していった。⁵⁸ また、こうした母親クラブの活動と平行して、彼女たちが熱心に取り組んでいたのが、バザーなどを通じた中華民国支援のための資金活動であった。とりわけ、1919年のパリ講和会議において、ウィルソンの「民族自決」の原則が東欧のみに認められ、アジア・アフリカには認められなかったことは、彼女たちの祖国支援活動に一層弾みを付けていった。⁵⁹

彼女たちがYWCA内に中国人女性委員会を立ち上げ、活動を始めた時期は、アメリカ国内においては第一次世界大戦が終わり、「アメリカ化」の圧力も少しづつ弱まってきた頃であった。そして、それはまた移民側からの「アメリカ化」への反動がみられた時期でもあった。これまでの「アメリカ化」圧力への反発、また一方では実際に「アメリカ化」が進んでしまったことへの移民コミュニティ側の危機感から、移民の「ナショナルリティー」ごとの境界線が、再

び引き直されていった。⁶⁰ YWCA側もこの時期、指針としての「インターナショナルリズム」の一環として、それぞれの移民の民族文化の保存と継承に関する活動に対して積極的に支援を行った。フォーク・フェスティバルや民族パレードといった催しにも、様々な形で援助していった。「中国人女性委員会」のメンバーにとっても、インスティテュートが掲げる「インターナショナルリズム」及びその活動内容は、彼女たちが思い描いていたものと大きな齟齬をきたすようなものではなかった。しかし、この「ナショナルリティー」ごとに、民族衣装を着て、民族舞踊を踊り、民族歌謡を歌うといった形の「民族文化」の表現は、当時の「中国人女性委員会」のメンバーにとっては、複雑なものがあつた。

1919年には、ニューヨーク市とコニー・アイランドの双方に、蠟人形の「アンダーグラウンド・チャイナタウン」が作られ活況を呈していた。またこれと同じ頃、「チャイナタウン、チャイナタウン、1\$でチャイナタウンへ」を売り文句とするチャイナタウン・バスツアーが開始され、多くの白人観光客が「物珍しさに」チャイナタウンへと足を延ばすようになっていた。⁶¹ 当時、中国的なものを「民族文化」として前面に出すことは、エキゾチズムを招き入れることでもあり、しいては前世紀来の「異人種中国人」を呼び起こしかねないものであった。そこで「女子委員会」が選んだのが、剣舞や中国では男性の出し物とされていた獅子舞といったものであった。中国における男性の「伝統的文化」を、中国人女性の活動的な「民族文化」として新たに作り替え、「ナショナルリティー文化」として表現

していったのである。

中国人女性委員会のメンバーが取ったこうした方向は、中国において進められていた新文化運動とも遠からぬ関係にあった。中国ではこの頃、ジョン・デューイのもとで学んだ胡適らを中心に新文化運動の一環として、「新文学運動」、「新歴史」、「新芸術」、「新詩」などの運動が開かれていた⁶⁵。それらは、「中国的な芸術・文化の保存ではなく、科学的な方法による再評価」を通じた「新たな中国文化の創造」をめざすものであった⁶⁶。こうした「民族的なもの」の再解釈・再評価を通じた創発的文化運動という点においては、この中国の新文化運動は、アメリカにおける「ニュー・ニグロ」運動とも通底するものがあった⁶⁷。しかし、アメリカの中国人にとつては、中国での運動のように、たとえそれが「新文化」であつても、全面的に「中国」を謳っていくことは難しく、また「ニュー・ニグロ」のように、その運動の中で「アメリカ」を謳っていくこともまた同様に難しかった。

「中国女子委員会」のメンバーが、その活動の中で試みたことは、「中国」や「アメリカ」を謳うことではなく、中国人女性の「市民としての資質」の向上と、エキゾチシズムに陥らない形での新たな「民族性」の構築であった。それはまた、ローワー・イースト・サイドの中国人が、近隣地区の他の「ナシヨナリティー」の人々と何ら遜色がないことを示していくことでもあった。この近隣地区の「ナシヨナリティー」との同等性は、結局移民割当法という形でもたえらされることになった。1921年と24年の移民割当法は、近隣

地区の「ナシヨナリティー」も中国人同様、移民制限対象とするものであった。もちろん、こうした形の「同等性」が、中国人を取り巻く状況を大きく変えることはなかった。そして、この「中国女子委員会」のメンバーが、一貫して積極的に取り組んだのが、中華民国に対する資金支援活動であった。そこには、よく言われるようなアメリカ国内における疎外感からくる、中国への関心や愛着、郷愁の念といったものもあった⁶⁸。しかしそれに加えて、近代国民国家としての中華民国の存在は、「エキゾチックな異人種」ではない、アメリカを構成する多数の「ナシヨナリティー」の一つとしての中国人というものを、背後から支える柱でもあったのである。

おわりに

本稿では、ニューヨークの移民街の最南端にあったチャイナタウンにおいて、20世紀初頭に中国人移民女性たちが展開した社会改革運動についてみてきた。彼女たちがまず「問題」として捉えたのは、19世紀都市モラル改革の中で浮かび上がり、また革新期における「アメリカ(的)国民」再編の動きの中にも持ち越されていった、中国人移民の「一移民」と「異人種」との間の「揺らぎ」であった。そして、この「問題」の原因を、中国人移民の「市民的性質」の程度と、出身国の「近代化」の程度にあるものとし、「人種移民」から「ナシヨナリティー移民」への移行にむけて、コミュニティ内の社会・教育活動と、中華民国に対する支援活動を展開していった。彼

女たちにとって、「ナショナルイテイ移民」となることは、すなわち当時の「アメリカ的国民」再編の動きの中で、中国人移民が何らかの場を得る足掛かりともなるものであった。またそれは同時に、「多元主義的」な「アメリカ(的)国民」の編成に向けた運動に、最前線ではないにしろ、後方から参加するものであった。しかし、前線の多元主義者が想定していた「ナショナルイテイ」と中国人女性側が想定していたそれとの間に質的な違いがあった。前者が、文化的、原初的かつ有機的なものを想定していたのに対し、後者は構築的かつ近代的なものを想定していたのである。よって、「民族文化」をめぐる浮かび上がったYWC A側と中国人女性委員会側の相違は、すなわち各々が想定していた「ナショナルイテイ」の相違でもあったのである。ニューヨークの中国人コミュニティの改革指向の女性たちが展開していった活動は、20世紀初頭の「アメリカ的国民」の再編が内包した問題の一端を明るみに出すものであり、また従来移民の故国ナショナルリズムとして捉えられていた祖国支援についても、この「アメリカ的国民」の再編過程と無関係ではなかったことを明らかにみ出すものであった。

(注)

(1) まず、1921年のジョンソン法によって出身国割当てによる移民制限の途が開かれ、1924年の出身国割当て法によって、移民の制限は明確に出身国別に行われるようになる。この割当て法

によって、南欧・東欧からの移民が大幅に削減されるとともに、アジアからの移民は事実上排除されることになる。

(2) Gayle Gullett, "Women Progressives and the Politics of Americanization in California, 1915-1920," *Pacific Historical Review*, 64(1995):71-94, John F. McClymer, "Gender and the "American Way of Life": Women in the Americanization Movement," *Journal of American Ethnic History*, 10(Spring 1991):3-20.

(3) Kumari Jayawardena, *Feminism and Nationalism in the Third World* (London: Zed Books Ltd, 1986), pp.1-24.

(4) Kumari Jayawardena, *Feminism and Nationalism*, pp.8-9.

(5) 排華移民法(1882)は、中国人労働者及びその配偶者の移民を禁じるとともに、同法によってすべての中国人移民は「帰化不能外国人」に指定され、市民権取得の途は以後1943年まで絶たれることになる。この排除期に中国からアメリカに法的に入国できたのは、学生、商人、司祭、政府関係者とその家族のみであった。本稿で取り上げる女性改革者の大半もまた、留学生としてアメリカに來たかあるいは商人、司祭、政府関係者の配偶者あるいはその娘である。ただし、中国人コミュニティの中には、排華移民法以前にすでに市民権を取得した者や、アメリカ生まれの2世などのアメリカの市民権を有する人々も存在していた。しかし当時は、アメリカ市民である彼らも帰化不能外国人という中国系移民に対する措置の影響の下にあり、本論ではこの両者を大きく分けて考察しなかつたことを断っておく。

(6) 「ニュー・ニグロ」は、1910年代後半から30年代前半にかけて、ニューヨークのハーレムを中心に繰り広げられた、一連の文化、芸術、思想及び社会運動の中で展開された黒人アイデンティ

ト。 (George Hutchinson, *The Harlem Renaissance in Black and White* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1995) を参照。

(7) Julia I. Hsuan Chen, "The Chinese Community in New York: A Study in Their Cultural Adjustment, 1920-1940," (Ph.D. diss., American University, 1941) p.5.

(8) Louis J. Beck, *New York's Chinatown* (New York: Bohemia Pub. Co., 1898) p.8, p.12.

(9) Rengui Yu, *To Save China, To Save Ourselves: The Chinese Hand Laundry Alliance of New York* (Philadelphia: Temple University Press, 1992) pp.12-19; L. Eve Armentrout Ma, *Revolutionaries, Monarchists, and Chinatowns: Chinese Politics in the Americas and the 1911 Revolution* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1990), pp.14-21.

中華總會館 (Chinese Consolidated Benevolent Association (CCBA)) は中国に存在するさまざまな組織の総称である。それ以外の組織は中国にのみ存在したものであるが、それぞれホスト社会との関係によりさまざまな姿を呈している。(Yu, *To Save China*, pp.16-17.) を参照。

(10) Frank Marshall White, "The Last Days of Chinatown," *Harper's Weekly*, 51(1907), pp.1208-1209.

(11) Paul Boyer, *Urban Masses and Moral Order in America, 1820-1920* (Harvard University Press, 1992(1978)), pp.146-149.

(12) Paul Boyer, *Urban Masses and Moral Order*, p.143.

(13) Louis J. Beck, *New York's Chinatown*, p.245.

(14) 売春婦に関しては、初期ニューヨークの中国人コミュニティでは、売春婦を含め中国人女性がほとんど存在しておらず、チャイナタ

ウンに占める売春婦の大半は白人の女性であった。

(Louis J. Beck, *New York's Chinatown*, p.108, Helen S. Campbell, *Darkness and Daylight; or, Lights and Shadows New York Life: A Woman's Story of Gospel, Temperance, Mission, and Rescue Work* (Hartford, Conn., A. D. Worthington & Co., 1892), p.558.) を参照。

(15) 例えが、ニューヨーク市警六分署の所長は、中国系を他の移民と比べて問題が少ないと評価し、次のように述べている。「シモンは、わざわざ来た人々であり、我々の手をばたかす必要を感ぜさせない。また、他の外国ナシモンナリティーよりもはや逮捕率が低くのも事実です。」(シモンは中国人を指す当時の俗語)

(Helen S. Campbell, *Darkness and Daylight*, pp.554.) を参照。
(16) Paul Boyer, *Urban Masses and Moral Order*, p.133.

(17) その年の11月、シモン・ホルズに番街プレスビテリアン教会の日曜学校には、約300人もの中国人が通っていたという。(Arthur Bonner, *Alas! What Brought Thee Hither?: The Chinese in New York, 1800-1950* (Associated University Press, Inc., 1997), p.116) を参照。

(18) 彼らのはとんどは、先に述べたチャイナタウンに中心を置く「伝統的」組織に加わり、生活を送っていた。しかし、当時のチャイナタウンは、既に改革気運が高まりつつあった中国本土よりも、場合によっては伝統的かつ権威主義的な社会であったとどう。実際彼らの中には、着したチャイナタウンの権威に反感を感じていた人々もいた。(Rengui Yu, *To Save China*, p.4.) を参照。
(19) 「中国人タリスチャンはたゞえ弁髪を落とし洋服を身につけていたとしても、タリスチャンとして信用すべきではなし」という声も上がった。(Louis J. Beck, *New York's Chinatown*, p. 233,

pp.247-248)を参照。

(20) Arthur Bonner, *Alas! What Brought Thee Hither?*, p.117-8.

また、暴行事件に関しては例えば、1881年4月、ニューヨークに来てまもなく1年になる22歳のユン・レイ・ティプは、洗濯屋から、23丁目のプレスビテリアン教会へ行く途中暴行を受け、その2週間後にセント・ヴィンセント病院で死亡している。ユンはニューヨークに来てすぐに教会に通い始めるようになり、その間欠席したのは3回だけだったと云う。(New York Times, May 7, 1881)を参照。

(21) 年間2ドルの会費を払わなくてはならなかったにもかかわらず、初年度には466名がすぐさま会員となり、2年後には会員数は612名に増加した。(Arthur Bonner, *Alas! What Brought Thee Hither?*, p.123.)を参照。

(22) 1885年にはビューイ・キン (Huie Kin) を牧師とする中国人プレスビテリアン・ミッションが開始され、1888年にはC・ソウル・ボク (C. Soul Bok) 牧師のメソジスト・ミッションが、また1892年には、ファン・モウ (Fung Y. Mow) を司祭とするバプテイストのモーニング・スター・ミッションが、ヘレン・クラーク (Helen Clark) の手によってチャイナタウンに設立されている。

(23) プレスビテリアン教会の中国人ミッションを率いるキンを中心に、ジョセフ・シンゲルトン (Joseph M. Singleton) 中国名チュウ・マンシン)、ガイ・メイン (Guy Maine) 中国名イ・カイマン) などのキリスト教徒の改革指向のグループが、チャイナタウンの浄化運動 (賭場閉鎖運動など) を行ったが、大方は失敗に終わった。メソジスト監督教会の司祭シン・フイモイも、中国人宣教を進めるにあたって、賭場と売春宿がその障害となっているとみていた。

(Louis J. Beck, *New York's Chinatown*, p.236) を参照。

(24) ただ、ワンは「古い」社会に加え、中国人のキリスト教関係者も問題視していた。キリスト教宣教に批判的であったため、ホスト社会からはアメリカに仏教を宣教するためにやってきたと勘違いされた。またワンの政治活動は、1882年以前に帰化した中国系アメリカ人をひきつけるのみに留まった。(Qingsong Zhang, "The Origins of the Chinese Americanization Movement: Wong Chin Foo and the Chinese Equal Rights League," *K. Scott Wong and Sucheng Chan eds., Claiming America: Constructing Chinese American Identities During the Exclusion Era* (Philadelphia: Temple University Press, 1998) p.48, pp.50-51.) を参照。

(25) *Chinese Weekly Herald*の創刊号 (1901年2月) の社説において「この問題が取り上げられている。」

そこでは、なぜ日常ちよつと歩けば遭遇する「他のナショナルイヤーの人々の、それこそ最もお粗末な人々にも与えられている市民権が、我々から剥奪されている」のか、と問うとともに、ニューヨークのローワー・イースト・サイドにおいては、みな同じく「移民」であり、その中でも評判のよい中国人が、なぜ他のナショナルイヤーと同等の扱いを得ることができないのか、との疑問を投げかけている。(Arthur Bonner, *Alas! What Brought Thee Hither?*, p.130.) を参照。

(26) この変法派の改革は短命で、「100日維新」などと呼ばれるが、この後海外の華僑を巻き込みながら、中国における改革あるいは革命運動が展開されていく。亡命した変法派の康や梁や、革命を唱える孫らは海外の中国人コミュニティを拠点とながら中国における運動を展開しており、海外の中国人コミュニティはこれ

ら一連の改革・革命運動の影響を様々な形で受けるとともに、積極的な支援も行っていた。

- (27) Warner Van Norden, *Who's Who of the Chinese in New York* (New York:1918), p.33.
- (28) Louis J. Beck, *New York's Chinatown*, p.244.
- (29) *Woman's Home Missions*, Vol.5, no.5 (May 1904).
- (30) Hule Kin, *Reminiscences* (Peiping/Beijing: San Yu Press, 1932) p.72.
ただ、子どもを送り迎えるために中国人女性が出ることとはまづなく、キン婦人が子どもを送り迎えるようになっていた。
- (31) L. Eve Armentrout Ma, *Revolutionaries*, p.152.
- (32) Julia I. Hsuan Chen, "The Chinese Community in New York", p.98.
- (33) Reports, General Assembly of the Presbyterian Church in the U.S.A. (1911), p.428.
- (34) "The Report of the General Welfare School in New York by Resolution of the Columbia Club," *Chinese Students' Monthly*, 6 (1910): 199, 289.
- (35) 辛亥革命を受けて設立されたこの中国人学校では、公立学校から帰ってきた子ども達に対して、(一) 中華文明への関心を高める (二) 高い理想と道徳を培う (三) 責任ある市民を育てる (四) 競争社会で生きていける技術と知性を培う、ことを目的とした様々な教育活動を行った。(Julia I. Hsuan Chen, "The Chinese Community in New York", p.42) を参照。また、中華民国支援に関しても彼女たちは活発に活動しており、この時期中国を襲った洪水と凶作による被害に対しても、「国民救済キャンペーン」と銘打って、幅広い募金活動を展開し、たとえば、コロンビア大学の

女子学生たちの洪水対策事業のための資金活動では、5日間で2,3千ドルを集めることに成功している。

- (36) たとえば、メソジストでは都市宣教においては、国旗を部屋に飾ったり、アメリカ的要素を活動の中に入れることを、指導している。また、1907年からは「キリストのためのアメリカ」をその内国宣教のモットーとして掲げ活動を展開した。("City Mission and the Immigrant Problem," *Woman's Home Missions*, Vol.23, no.7 (1906) 及び Vol.24, no.1 (1907) を参照。女性と子どもへの活動方針については、Mrs. C. W. Bickely, "Immigration Studies," *Woman's Home Missions*, Vol.23, no.8 (1906), p.383 を参照。
- (37) Kate Waller Barrett, "The Immigrant Woman," (1915), reprinted in Philip Davis ed., *Immigration and Americanization*, (Ginn and Co., 1920), p.228.
- (38) Francis Keller, *The Federal Administration and The Alien: A Supplement to Immigration and the Future* (New York: George H. Doran co., 1921) p.70.
- (39) Reports, General Assembly of the Presbyterian Church in the U.S.A. (1914) p.15.
- (40) Reports, General Assembly of the Presbyterian Church in the U.S.A. (1914) p.90.
また、ニューヨークの移民宣教においてイタリヤ系に次ぐ予算を中国系に当てていたバプテリスト派でも、「中国における宣教においては、キリスト教原理が中国の慣習とぶつかり合わないよう、その慣習を受け入れる必要があるが、アメリカ国内に居住する人々については別の視点が必要である」と、内国宣教を海外宣教の延長線としない方針を打ち出していた。しかし、実際にはこ

の区分は曖昧であり、またアメリカ化の圧力はこの言葉ほどは強硬なものではなかった。(26th Annual Report, the New York City Baptist Mission Society, (1918) p.12.) を参照。

- (41) Florence Brugger, "The Chinese American Girl: A Study in Cultural Conflicts," Master's Thesis, New York University, 1935, pp.68-74.

- (42) ブールなどのスポーツ施設の使用においても、中国人と他の移民とは分けられており、接触する機会が与えられなかったという。(Florence Brugger, "The Chinese American Girl," pp.68-74.) を参照。

- (43) Fourth Report, Chinatown Settlement for Girls (1908) p.6, Sixth Report (1910), p.2.

このチャイナタウン・セトルメントは1904年にモット通り10番に設立されている。調査などを行い、それに基づき活動方針などを決めていたようである。1909年の調査では、「この地区から中国人の白人妻が大方姿を消した」と高く評価している。(Fifth Report (1909) p.5.) を参照。

- (44) たとえば、P.S.I.の教師で家庭訪問活動も行っていたマーガレット・P.・ラエ教諭も、中国人の子どもについては「私が今まで出会った子どもたちの中で最も聡明な部類の子どもたちである」とし、またその母親たちについても、「最もホスピタリティに溢れる人々」で、「そのきれいに整った家は……友好的な雰囲気満ちている」と評価している。(Julius Su Tow, *The Real Chinese in America* (New York: The Academy Press, 1923), p.62.) を参照。
- (45) Florence Brugger, "The Chinese American Girl," p.82.

- (46) こうしたソーシヤル・ワーカーは、近隣の移民地区では時に歓迎されないこともあり、問題がないわけではなかった。ただ、リリ

アン・ウォルドは、「ヘンリー・ストリートのセトルメントの見学に招いた中国人コミュニティーの関係者が「30年この国に住んでいるが、(こうして)ホームに招かれたのは初めてだ」と興奮してこのことを伝えている。

- (47) Lillian D. Wald, "New Americans and Our Policies," reprinted in Philip Davis ed., *Immigration and Americanization*, p.434.) を参照。

- (47) Catherine Gipoulon, "The Emergence of Women in Politics in China, 1898-1927," *Chinese Studies in History* (Winter 1989-1990), pp.47-67.

- (48) 1920年頃のチャイナタウンは仏教徒が減り、また儒教の影響力も落ち、かわりにキリスト教がコミュニティーの中で影響力をもつようになった。(Julia I. Hsuan Chen, "The Chinese Community in New York," p.43.) を参照。

- (49) Edith Terry Bremer, "Americanization," National Board of Young Women's Christian Association, *The Women's Press* (June 1919) p.259.

- (50) 1919年には、ブレマーはカレンらとともに、「インミグランツ・イン・アメリカ・リヴュー」(*Immigrants in America Review*)の創刊号に論文を発表している。Horace M. Kallen, "The Meaning of Americanism," *Immigrants in America Review*, I (January 1916) pp.12-19, Edith Terry Bremer, "Foreign Community and Immigration Work of the National Young Women's Christian Association," pp.73-82.

- (51) カレンの文化多元主義は、「ハイフン付きアメリカ人」すなわち「様々なナショナルリティ」の連邦としてのアメリカを構想するものであったが、実際に彼が想定していた連邦とはヨーロッパからの

移民によるものであった。また、カレンの「ユウヤウ」の「ハイフン付アメリカ人」には「民族めぐるは人種決定論的な傾向があった。」(Horas M. Kallen, "Nationality and the Hyphenated American," *Menorah Journal*, 1 (1915), p.85)を参照。

- (27) Isaac B. Berkson, *Theories of Americanization: A Critical Study* (New York: Teachers College, Columbia University, 1920), 98; Julius Drachlesler, *Democracy and Assimilation: The Blending of Immigrant Heritages in America* (New York: Macmillan, 1920), 214-216.

- (28) Division for Foreign-Born Women, "An International Institute For Young Women: Through Which the Y.W.C.A. Helps New Americans," National Board of Young Women's Christian Associations (1918).

- (29) Edith L. Jardine, "International Institute for Foreign-born Women," YWCA of the City of New York, *Annual Report* (1919) p.37.

- (30) Letter from Miss William Hanz to Miss Ruth Grawford, Sep. 3rd, 1918, National YWCA Papers, Archives of the National Board of the YWCA, New York City.

- (31) Letter from Miss William Hanz to Miss Ruth Grawford, Sep. 3rd, 1918.

- (32) Letter from Miss Edith Terry Bremer to Miss Rhoda Kong, Oct. 22rd, 1919, National YWCA Papers, Archives of the YWCA., Rhoda Kong, "Memorandum 31," National YWCA Papers, Archives of the YWCA.

- (33) こうした母親を対象とした活動は、当時のアメリカ化運動推進者による活動とも路線をともにするばかりでなく、中国における

「賢い女性は、賢い母になり、賢い子どもを育てる」とのスローガンのもとに進められていた女性の改革・解放運動とも歩調をともにするものであった。「母親」の役割と云う点においては、両者の間に大きな違いは見られなかった。例えば、女性クラブで活躍していたカレン・ヴァリック・ボズウェルは、「移民女性をよむ市民にしよう。そして彼女たちの家庭がアメリカの家庭となるよう手助けしよう。そうすることによって、子どもたちに家庭においてアメリカの理想を伝え、アメリカの生活基準はロシエニチー全体に行き渡らなければならない。」と述べた。(Helen Varick Boswell, "Promoting Americanization," *The Annals of the American Academy of Political and Social Sciences*, 64 (March, 1916), p.206)を参照。

- (34) 「母親」という役割を通じた「市民」としての国への貢献という考えは、アメリカにおいては独立戦争後の「共和国の母」にそのプロトタイプみられるところだ。また中国におうづまるといって清朝時代に強調された「賢母」としての女性のあり方にそれがみられる。スーザン・マンは清朝の女性に関する研究の中で、この「賢母」的な女性のあり方を、アメリカの「共和国の母」と比較している。(Susan Mann, *Precious Records: Women in China's Long Eighteenth Century* (Stanford, California: Stanford University Press, 1997), p.120)を参照。

- (35) 中国におうづまるといってのハリ講和会議の結果は五・四運動へと繋がっていく。
- (36) Lizabeth Cohen, *Making a New Deal: Industrial Workers in Chicago, 1919-1939* (Cambridge University Press, 1990) p.28, p.54.

- (37) こうしたチャイナタウン・ツアーでは、中国人ギャングの抗争や

- 阿片窟、売春婦などの話しがチャイナタウンの歴史として、シア
ー客向けに脚色された語られた。(New York Times, Oct. 19, 1919)
を参照。
- (62) 胡適はアメリカのロロンビア大学でジョン・デューイからプラグ
マティズムを学んだのち、1917年に中国に帰国して「新文学
運動」を中心とする新文化運動を展開しようとした。
- (63) Immanuel G. Y. Hsu, *The Rise of Modern China* (Oxford
University Press, 1995) p.499.
- (64) ノーレム・ルネッサンスとプラグマティズムの関係については、
George Hutchinson, *The Harlem Renaissance in Black and
White* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1995),
Part I, Ch.1を参照。
- (65) Judy Yung, "The Social Awakening of Chinese American Women
as Reported in Chung Sai Yat Po, 1900-1911," Vicki L. Ruiz and
Ellen Carol Dubois (eds), *Unequal Sisters: A Multicultural
Reader in U.S. Women's History* (Routledge, 1994) p.248.

"Nation" and "Nationality"
- From the Social Reform Movement at the Outset
of the 20th-Century in New York's Immigrant Districts
by Chinese Immigrant Women -

Motoe SASAKI

This paper takes up the social reform movement at the outset of the twentieth-century in New York's immigrant districts by Chinese immigrant women, focusing upon the relationship between their concepts of nation and nationality in the context of changes in American society during the period.

Through the 1882 Anti Chinese Immigrant Act, immigration to the United States was for the first time restricted by nationality, as Chinese immigrants were classified "foreigners ineligible for naturalization." Furthermore, with the rise of the urban moral reform movement at the end of the nineteenth-century, the view toward Chinese in America vacillated between that of "immigrant" on the one hand, and "alien race" on the other hand, giving Chinese immigrants an unstable existence in the United States. These events took place even as the Americanization Movement sought to naturalize immigrants in the United States.

Chinese immigrant reformers interpreted this problem of recognition as owing to Chinese immigrants' own weak "civic disposition" as well as to the inadequate level of modernization of China itself. Thus, they began a movement to assist their home country and to improve its status in America. In order to remedy what they perceived as deficiencies in Chinese "civic disposition," Chinese women reformers established a branch of the YWCA International Institute in Chinatown, an organization espousing cultural pluralism and engaged in social and educational activities toward Chinese immigrant women.

Moreover, these women reformers attempted to elevate the "civic disposition" of Chinese women and to construct a new form of Chinese "nationality" that avoided connotations of 'exoticism.' This new version of Chinese "nationality" stands in contrast to the 'primordial' or 'traditional' nationalities of immigrants from Europe in that it sought a place for Chinese within the pluralist American reform movement through a constructed and modern sense of Chinese "nationality."

Key words

Chinese immigrants, Americanization movement,
Women reformers, Cultural pluralism